

会場として開催された。人口に関する発表は、以下のとおり、26日の「一般研究発表」で4件、ポスター発表で1件がなされ、活発な議論が展開された。

[一般研究発表]

山本 悟（山口大学・院）：コロナ禍に於ける地方移住の潮流変化に関する一考察—山口県央地域へのテレワーク移住を中心に—

若林芳樹（東京都立大学）：コロナ禍における日本の居住地選好の変化—オンライン調査の結果—

王子豪（立命館大学・院）：「分散化」する中国系ニューカマーとそのコミュニティ—大阪市中央区「心斎橋地区」を事例に—

豊田哲也・奥嶋政嗣（徳島大学）：地方圏出身者のUターン移動と相対所得仮説—個人の所得水準と階層帰属意識による分析—

[ポスター発表]

山神達也（和歌山大学）：コロナ禍の非大都市圏における人口移動の変化—和歌山県の事例—

（久井情在 記）

第7回 UNFPA 少子高齢化グローバルシンポジウム

2023年11月30日（木）～12月1日（金）、韓国・ソウルの日中韓三国協力事務局会議場で、UNFPA（国連人口基金）と韓国統計庁が主催する第7回 UNFPA 少子高齢化グローバルシンポジウムが開催された。2日間、6つのセッションにて、日中韓の少子高齢化の現状や国際的な高齢者の定義、健康で活動的な高齢化、今後の介護制度とASEAN諸国の視点も交えた医療・介護財政、世代間交流について報告・議論が行われた。筆者は2日目の「ケア経済と人材」というセッションでアジアにおける保健・介護人材に関わる報告を行った。

前回（第6回）会議はハイブリッド開催で、アジアのみならず、東欧や中南米を含む参加があったが、今回は対面開催であり、参加者はアジア中心であった。少子高齢化は世界にひろがりつつあり、同様の会議が継続的に開催されることが期待される。

（林 玲子 記）

韓国人口学会2023年後期学術大会

2023年12月2日（土）に韓国人口学会後期学術大会が高麗大学ソウルキャンパスにて開催された。韓国人口学会では基本的に韓国語による報告が中心であるが、キーノートスピーチや国際セッションでは英語による報告・議論が行われた。本研究所からは林玲子副所長と著者が参加をし、それぞれキーノートスピーチと研究報告を行った。著者が行った研究報告のタイトルは次のとおりである。

Nozomu INOUE “Impact of Changes in Family and Age Structure on Household Energy Consumption.”

（井上 希 記）